

# 婚難の中で

第3部「いつか母に 卵子凍結のいま」④

出産を望む女性を中心に卵子凍結の認知度は上がった。それでも慎重論は根強く残る。将来のためにできることはしておきたいが、周囲から奇異な目で見られたくないと、後ろめたさを感じる女性たちがいる。

大手メーカーの社員として神奈川県で働く現在独身の五島晶子(39)＝仮名＝は、卵子を凍結するかどうか迷い続けてきた。2013年夏に東京都内で無料セミナーに参加し、その勢いで有料のカウンセリングも受けたが、踏み切れないまま4年近くが過ぎた。

## ただ受け止めてほしい

子どもに関するすれ違いが原因で離婚した経験がある。将来のパートナーのために可能性を残そうと卵子凍結を検討したものの、仕事の忙しさや費用が気になり断念した。だが今振り返ると「全部言い訳だった」と思う。本当は周囲の目を気にしていた。

もともと体裁を気にする性格だ。結婚の予定もないのに、将来使うかどうか分からない卵子を凍結することが恥ずかしかった。世間の男性の反応も気になる。思い切れずにいたが、最近になって海外転勤の話が浮上。確定したら赴任前に卵子を凍結するつもりだ。

## 慎重論に後ろめたさ

岡山大学大学院教授の中塚幹也(55)が全国の18歳以上の男女1322人を対象に行った16年の調査によると、健康な女性が将来に備えて卵子を凍結することについて56%

が「認める」と答え、「認めない」の44%を上回った。しかし詳細に見ると、立場により意見が異なるのが分かる。高齢になると期待している、子ども



仕事の資料で膨らんだかばんを肩に掛け、オフィスビル街に立つ五島晶子(仮名)＝6月、東京都内

もいる女性は全体の平均よりも各年代で「認めない」の割合が高い。子どもがいない30代後半から40代前半の女性は「認める」が圧倒的に多い。不妊治療も行う中塚は「日本は子どもができない女性に不寛容。仕事で活躍しても、子どもができないだけで劣っていると感じてしまう雰囲気がある」と指摘する。晶子は最近、人に堂々と説明できる理由を無意識に探していた自分に気付いた。「社会的な支援を求めているわけじゃない。女性の気持ちをとただけ受け止めてほしいだけ」いつか「卵子凍結も女性の選択肢の一つ」と淡々と受け入れられる日が来ると期待している。

(敬称略)